

浅茅原

つばらつばらに

もの思へば

故りにし郷し

思ほゆるかも

大伴旅人(巻三・三三三)

も詠んでいます。

この歌は大宰府で詠まれた望郷歌群の一首で、「故りにし郷」とは若き日を過ごした明日香(飛鳥)を指していたとみられます。

平城京へ遷都して既に20年が経ち、今は大宰府に身を置きながら、ふと気付くと心はいつも明日香へ飛んでいたのかもしれない。

今から5年前の2019年5月1日に、『万葉集』に由来する元号「令和」が施行されました。

730(天平2)年に、大宰帥(大宰府の長官)であった大伴旅人の邸宅で梅花の宴が催されました。その宴で詠まれた短歌群(巻五・八一五〜八

四六)の前に置かれた漢文の「序」に、「令」と「和」が登場します。

序文には、良い季節を迎えて白梅が美しく咲き、香草が良い香りを漂わせている。心地よく酒を酌み交わしながらそれぞれが満ち足りているこの心境は、詩歌でなければとても言い表すことなどできない。

やまと
万葉がたり

い。中国でも多くの落梅の詩篇があるが、我々はこの庭の梅を和歌に詠もうではないかと参集した人々に和漢折衷の斬新な作歌を呼びかける内容が記されています。中国の有名な書家である王羲之が催した宴をもとにした詩集の序「蘭亭序」を踏まえてお

り、文脈は異なりますが、『詩経』や『文選』などから影響を受けた表現もうかがえます。大陸文化の玄関口であった大宰府で、当時まだ珍しかった外来植物の梅を主題に開かれた、知的な

宴でした。そんな風雅な宴を主催した旅人は、序文にあるとおり、中国文学の表現を踏まえながら、梅花歌や讃酒歌など斬新な和歌を残したことで知られますが、古き良きものへの思い

(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか)

《口語訳》浅い茅がやの原、つくづく物思いにふけると、あの明日香故郷がなつかしいことよ。

矢形尾の

真白の鷹を 屋戸に据ゑ

かき撫で見つつ 飼はくし好しも

5月10日から16日は愛鳥週間です。野鳥を含む自然環境について知り、その保護について考える契機といえます。

この歌は、「白き大鷹を詠める歌」と題された長歌と二組の短歌で、大伴家持が750(天平勝宝2)年に詠んだ歌です。オオタカは「蒼鷹」とも記され

ており(巻十七・四〇一一)、体の大きさはなく青みがかった灰色の羽を持つことによる名とみられます。

大伴家持は当時、現在の富山県高岡市にあった越中国府に国守として赴任していました。この時期の家持は多くの歌を詠んでいることで知られますが、この年は鳥を詠む歌が

やまと
万葉がたり

とくに目立ちます。「飛び翔る鷹を見て作る歌」(巻十九・四一四一)、「帰る雁を見たる歌」(同・四一四四、四一四五)、「夜の裏に千鳥の喧くを聞ける歌」(同・四一四六、四一四七)、「晩に鳴く雉を聞ける歌」(同・四一四八、四一九九)など、単に鳥の名を詠み込んだ歌とい

大伴家持(巻十九・四一五五)

うよりは、鳥を主題とした作品群であり、中国文学の題詠詩の影響を受けていたと考えられます。ちなみに、鷹を詠んだ万葉歌はすべて家持の作です。

この歌の長歌(四一五四)では、長く都を

オオタカは、1993年に希少野生動物種(絶滅危惧種)に指定され、保護活動の結果、個体数が増えたことを踏まえて指定解除されました。しかし現在も鳥獣保護法に基づき保護対象であることにはかわりなく、私も家持歌とともに自然環境保護について考えたいと思います。(県立万葉文化館・井上さやか)

《訳》矢形の尾羽をもつ白斑の鷹を家に据えて、撫で見ながら飼うのはよいものだ。

紫は 灰さすものそ 海石榴市の 八十の衢に

逢へる児や誰

作者未詳(巻十二・三二〇二)

せんが、歌垣における男女のやりとりを垣間見ることが出来ます。

「紫は灰さすものそ」の部分に、結婚してこそ美しくなるものだ、という意が含まれているとみる説もありま

す。たんに椿・海石榴市を導く前置きではなく、男性が何とか女性を説得しようと工夫した表現なのかもしれません。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

この歌は『万葉集』巻十二、「問答」の部に収められた一首です。問答は複数の歌の組み合わせで、ここでは男女のやりとりになっ

ています。掲載の歌は女性を指す「児」に呼びかけていることから、男性の歌だと考えられます。

海石榴市は最古の市とも言われ、ツバキの木があったと考えられています。現在の桜井市金屋付近にあたり、古代には多くの道が交

やまと
万葉がたり

わる交通の要地でした。人が集まる交差点、「衢」の市で、歌垣という男女の歌の掛け合いが行われる風習がありました。そこで名をたずねることは求婚を意味していたようです。名は実体に直結する大切なものと見なされたためでしょう。

さて、この歌に対する女性の返歌は次のよう

なものですか。「たらちねの母が呼ぶ名を申さめど路行く人を誰と知りてか(たらちねの母が私を呼ぶ名を告げもしようが、さて道の行きずりのあなたを、どんな人と知って告げるのでしょうか)／巻十二・

「詠」紫の染料は灰汁を入れるものよ。灰にする椿の、海石榴市の八十の辻に逢ったあなたは何という名か。